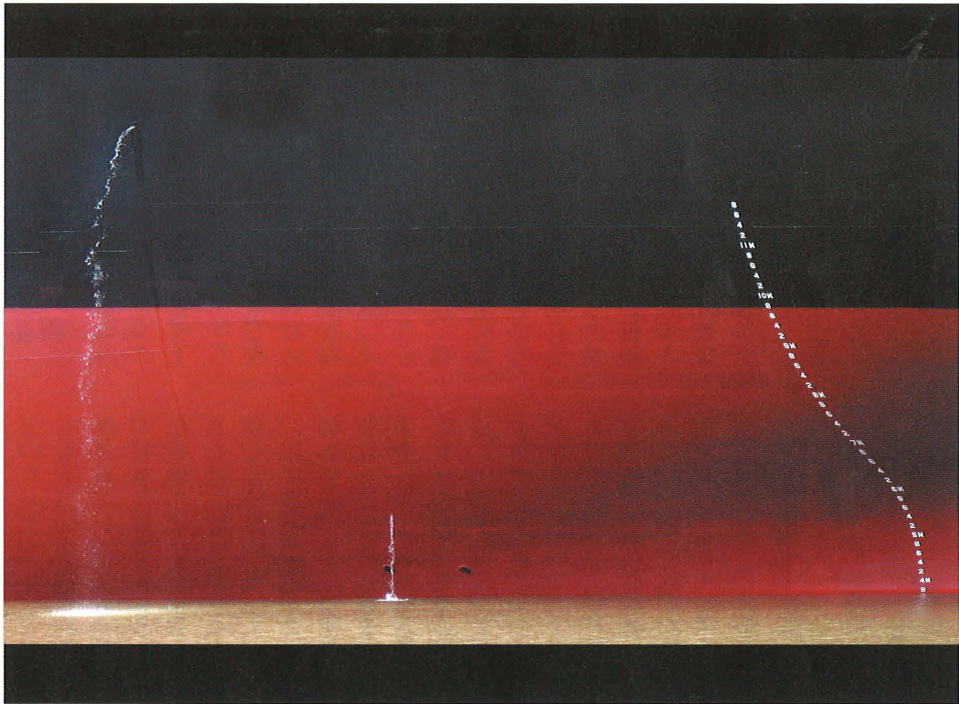


# 文化高知

2007年11月 NO.140



「ライン」東富 晋幸

〈もくじ〉

はじめに市民ありき .....	千浦孝雄	2
土佐の言葉 .....	宮脇孝雄	3
楽しむ力が、世界をつなぐ .....	下司美和	4～5
北川村「モネ」の庭から BON JOUR フランス文化と商業施設の狭間にて .....	儘田靖夫	6～7
P u u j e e .....	山田和也	8～9
高知のギャラリー② ギャラリーおおひら .....	大平哲郎	10
言葉の現場から⑥ .....	西岡寿美子	11
地の名も無き偉人たち⑤ 天下の『朝日新聞』に囁みついた男—馬場孤蝶— .....	高橋 正	12
九～十月の事業のご報告 .....		13
風俗歳時記・風伯 .....		14～15

# 「はじめに市民ありき」

千浦孝雄

これは、昭和五十四年九月に開館三十周年を迎えた高知市民図書館が「市民の図書館―三十年の歩み―」と題して発行した記念誌に投稿いただいた福田義郎さんの一文のタイトルである。

『戦後の高知市の文化を語るとき、高知市民図書館の存在を抜きにすることはできない。在来の図書館は本を閲覧させる役所にすぎなかったが、それが利用者主体の行き方に転換したのがこの図書館であった。すべて市民の願いに応えていくという形をとった。「はじめに市民ありき」というのが、この図書館の発想の原点であろう』と書かれている。

近年、高知市の財政状況の悪化が取り沙汰されている。全国の自治体で起こっていることであり、高知市に限ったことではない。

小さな政府や事業の効率化を目指すことは当然のこととしても、今の

流れを「なんだかおかしい」と感じるのは私だけだろうか。

国の財政状況の悪化に伴い、三位一体改革なるものが当たり前のようになり、補助金や地方交付税の切り捨てがまかり通っている。

ただ、文化施設に目をやれば、諸悪の根源は「指定管理者制度」にあるように思えるのだが、どうだろうか。

改正前の地方自治法では『公の施設』を民間に管理委託させるのは違法であって、各自治体は、あの手法で合法的な公的団体を作り、管理の手で合法的な公的団体を作り、管理を委託する事になる。それが国の意向だったはずなのだ。

しかし、突然のごとく法律を改正し、文化施設を直営でやっているとは何事か、民間に管理運営を任せ費用対効果を図りなさいと、これまでの規制が無かったかのように振る舞っている。

僕はこういう風潮こそが村上フア

ンドの村上代表の「お金儲けは悪い事ですか」と言わせているのだと思っている。

今、県・市図書館の統合が取り沙汰されている。元々は、中心市街地の活性化に端を発した追手前小学校と新堀小学校の統合後の敷地を利用した活性化策のひとつとして検討課題となっている。

建て替えの時期を迎えている市民図書館が、中心市街地活性化のため新たな場所へ建設される事は、多くの利点があり大賛成である。だが、県立図書館と統合する話は、难道か「お金を掛けない事は悪い事ですか」と言っているみたいである。

県立図書館には、県下の公立・私立図書館や読書団体への知的・物的支援や、将来にわたっての高度なレファレンスサービスの確保や視聴覚ライブラリーの充実など県立ならではの役割がある。

市民図書館も同様に、地域に根ざして小さいながら分館、分室併せて二十館を有し、人的・財政的な事情で高度なサービスはできないけれど、「読書を地域に」との観点から市民と密着した図書館運営を行っている。

また、日常施設である図書館が「ひとつ減る」ことは、どうなのだろうか。

これからの投資は、将来の五十年を見据えたものでなければと思う。それには「はじめに市民ありき」の思想が息づいてこそ『市民の図書館』だと考えている。

ちうらたかお／高知市立市民図書館長

# 土佐の言葉

宮脇孝雄

県外で生活をするようになって三十数年、折に触れて高知のことを思い出すが、以前は食べ物がそのきっかけになることが多かった。

たとえば、ヤマモモ。子供のころ、夏休みに遅く目覚めると、早朝にヤマモモ売りのおばさんがきていたらしく、昼になるともう味が落ちる、あの暗紅色の実が食卓に山盛りになっている。塩をふりかけて口に含んだときの酸味が、ふと口に広がって、夏の朝の空気まで記憶にのみがえる。

また、うちの生まれ在所でお客をするときによく出てきた底豆（ピーナツ）の天麩羅。地元で採れたばかりの底豆を、拍子切りにしたサツマイモと一緒に小麦粉のころもで揚げるのだが、あんな食べ物ほかではお目にかかったことがない。

年を重ねると、さすがに食意地も張らなくなったのか、夏の朝にヤマモモを思い出したり、秋の早い夕暮れに底豆の天麩羅を思い出したり

する機会も少なくなった。代わりに、近ごろでは言葉で高知を思い出すことが多い。

上京して予備校に通っていたとき、こちらが高知県出身だということを知った古文の先生に、「ぢぢぢぢ」と「ぢぢぢぢ」を発音してみなさい、と名指しされたことがある。聞けば、似たような体験をした友人が何人かいて、どういことだろうと揃って首をひねったものだった。

なんでも、本居宣長の『玉勝間』という二百年前の本（今でいうエッセー集）に、「土佐の人は「じ」と「ぢ」と「ず」と「づ」の区別ができるので、いろはを覚えればかりの子供でも仮名遣いを間違えることがない」という一節があるそうで、その古文の先生は高知県人の実物を見つけて、宣長説の検証を試みたらしいのである。

つまり、「自信」と「地震」は、今ではどちらも「じしん」と読むが、

高知県人はそれを読み分けて、それぞれ「じしん」「ぢしん」と発音する。同じように、「鼻血」は「はなぢ」ではなく、「はなぢ」と読む。ア行の「お」とワ行の「を」も区別できる。

私たちの世代になると、「ぢ」や「づ」や「うお」の音は、祖父母の口から聞いて耳に馴染んでいるが、もう「ぢ」と「づ」を明確に発音し分けることはできないし、「ご飯うお食べる」ともいわない。

だが、すっかりその痕跡は今でもかすかに残っていて、小中学生の口からも、残り香のように漂うことがある。

十数年前、イギリスのウェールズ地方に行ったとき、今では廃れたウェールズ語を復活させるため、小学校のカリキュラムにウェールズ語の授業を組み込んでいるのを知ったが、「ぢ」「づ」「うお」も一種の無形文化財であり、私が知事なら――とい

うのは、冬のヤマモモくらいありえない話だが――小学校の教科に「五十音の時間」を設けて、「ぢ」「づ」「うお」の教育に力を入れるだろう。このあいだ高知に戻ったのは五年前ほど前のことで、そのとき「お墓の引越し」があった。広い道を作るため、山が一つ崩されて、そこにあったお墓が別の場所に移されたのである。

その山は子供のころによく遊んだ山だったので、白々しく真つ平らになって、一変した風景を見るのは淋しかった。山や川は、何十年たっても変わらないはずだったので、あっさり消えてしまったのである。

だが、今のところ、言葉の響きは変わっていない。ついでに、不義理を重ねている親類の家をまわって仏壇にお線香を上げてきたが、そのとき、遠い旅に出る者が鞆にたくさん食糧を詰めるように、私より一世代上の老人たちの話をたくさん聞いてきた。

そして、耳の中に土佐の響きを閉じ込めて東京に戻った。  
(みやわきたかお・翻訳家)



# 楽しむ力が、世界をつなぐ

## Jazzchor Freiburg in Kochi 2007

下司 美和

お酒と賑やかなことが大好き。人が困っていたら、手も口も出さずにはいられない。そんな仲間と今年の夏、あるコンサートを主催した。これは、私が体験した新しいコミュニケーションのカタチと、楽しく不思議な仲間の話である。

### 「楽しみたい」が原動力

世界的なコンクールで数々の受賞歴を持つ、ドイツのコーラスグループ「Jazzchor Freiburg」。市民を中心としたグループでありながらその実力はかなりのもの。五年前、彼らの公演を高知の市民でつくる実行委員会が主催し大成功を収めた。その時の歓待と高知の人と風土が気に入ったグループから、五年ぶりのジャズコンサートを高知で開催したいと依頼があったのが話の始まりである。

そう言われると、前回以上に楽しいことを、観客にもグループにも何より自分たちにもプレゼンしたいというおせっかい心を持った人たちが、楽しそうな匂いを嗅ぎつけモゾモゾと動き出す。地域づくりコンサルタント、生花店店主、陶芸家、地元企業の社長、商業デザイン業、行政職員など。普段それぞれの仕事を携う二十三人の顔ぶれが、

『こうち・ジャズコーア実行委員会』として集結した。

しかしこの会、五年前の経験者は数名でその他のメンバーは初参加。コンサート開催には素人ばかりで資金はもろろん0円である。そこで、やるからには会への責任とリスクも必要と、みんなで一万円ずつを出資。とにかく、何でも楽しんでやろう！という勢いだけはあるメンバーは、事務局が発表した「千人を収容する会場のチケットが全席売れて初めて黒字」という恐ろしい収支計画にも、ちょっとだけ動揺したくらいだった。

そして「満席の会場でコンサートに成功させる」「高知とフライブルクの市民同士の友情交換をする」という二つのミッションに向かい、私たちは動き始めたのである。

### 新しい仲間、続々と現る

だが、千人の観客に満足してもらうコンサートとなると、お気楽ばかりではいられない。月に一〜二回仕事帰りに会を開き、それぞれのネット



ウェルカムパーティーで。歌う楽しさは世界共通だ！

室の先生がボランティアで、音響技術には前回公演を観たプロの方が、格安料金で協力を申し出てくれるなど、なんか楽しそうなことやってくるな」という波はどんどん広がっていく。そして何よりも強力な味方だったのが、会場となる「かるぽーと」を管理運営する高知市文化振興事業団の存在。私たちの活動に賛同していただき、共同主催というカタチで資金面のみならず運営面でも大変お世話になった。こうしてたくさんの方が集まり、公演の形は少しずつ出来上がっていった。

### 言葉なんかいらぬ

今回は、グループとの交流も大きな楽しみの一つであった。そこで出てきた案が、公演前日のウェルカムパーティーとサプライズライブ。『Jazzchor Freiburg』のレパトリーの一曲を内緒で練習して、パーティーで披露するというステキなアイデアだ。これは、公演準備と同時進行で進み、高知で活動している『アースデイズ・シンガーズ』と実行委員会を中心とした三十五人が、合計四回の練習時間を持ち完成度を高めていった。そして、当日にはグループを率いる指揮者ベアトラン

ド・グレーガー氏に指導を受け本番へ。歌うことが大好きなグループのメンバーたちは、熱唱する東洋人に興味津々で大興奮！初めて会って、まだツアーも始まっていないのに、打ち上げみたいに盛り上がりすぎてしまった。あつという間に仲良くなってしまった。

高知を好きになってもらうには、高知を好きな自分たちがまず楽しむこと。そして楽しい思いを精一杯伝えること。そうすることで、言葉は通じなくても気持ちが通じた瞬間だった。こうして、私たちのミッションの一つである「友情交換」は、初めて会ったその日に達成されたのである。

### 九回裏からの逆転劇

公演までの道のりは、順調なことばかりではなかった。チケットを売り始めて一カ月経った日の実行委員会。手売りで七割は確保しなければならぬはずが、なんと半数も売れていないのである。確かにグループの知名度は低く、出来る限りの広報はしているものの彼らの素晴らしいステージを伝える術は少なかった。だからこそ私たちが、一人ひとりに手売りで伝える必要があったのだ。

それに加えよきこい祭りの真っ最中という状況もあり、チケット売り上げは低迷していた。

こうなると「楽しかったらいい」では通用しない。私たちは、高知のたくさんの人に観てほしいこと、チケット収入だけが運営費の頼りになっていること、そして何よりもグループに満席のホールをプレゼンしたいという思いを再確認。公演まであと半月を切った日、ノルマを設定し、全員でかるぽーと満席に向けての追い込みが始まった。楽しむために多少の苦しみも必要なのだ。

そして迎えた公演当日、みんなの気持ちが一気に加速し、会場は満席御礼となった。ロビーではドイツビールとドイツパンも販売され大好評！スタッフも当日ボランティアの皆さんも、広い会場を奔走した。公演は言うまでもなくステージと客席が一体となる盛り上がり。アンコールには三階席まで埋まった観客が総立ちになり、その拍手と歓声に鳥肌が立った。

半月後、私たちは公演のDVDを観ながら、大いに呑ん



トールン・エリクセンをゲストに迎え、見応えあるステージを展開

で成功を祝った。たった一回のコンサートのためだけに集まった仲間は、それぞれの日常に戻っていったが、みんな心の中でいつも楽しいことを探しているに違いない。そして、いつかまた出番が来た時には、モゾモゾと集まってくるに違いない。

（げしみわ／こうち・ジャズコーア実行委員会）

# 北川村「モネ」の庭から B O N J O U R

フランス文化と商業施設の狭間にて

儘田 靖夫

高知市内から車で九十分もかかる北川村でなにがボンジュール？ 疑問に思われる方も多いことでしょう。これから謎解きをしていきますので最後までお付き合い下さい。

モネの庭がオープンしたのが二〇〇〇年四月のことでした。が、話をもっと以前にさかのぼります。もともとモネの庭の敷地は、一九八〇年代より北川村が工業団地を誘致しようとして造成した土地だったのです。しかしバブル経済の崩壊とともに計画は頓挫。まさに暗中模索の中、一九九六年に「地域活性化協議会」なるものを立ち上げます。地元・県内外より委員を集め、何度も何度も議論を交わす日々が続いたのです。むなししい日々が過ぎていく中、ある一人の委員から「フランス印象派の画家、クロード・モネがその半生を過ごしたフランス・ジヴェルニーにモネが丹精込めて造った庭がある。今では、モネ財団が運営をしております年間四十

〜五十万人の観光客が訪れている。あのような庭をここに造ることができたならナント素晴らしいことだろう。」というとてもない意見がだされたのです。一応検討はしてみたものの、どうアプローチしてよいのやら。これといった案も出ないまま、直接フランスに当たってみるしかないという結論に達し、無鉄砲にもフランスにコンタクトしたのです。先方もいきなりの話でさぞ面食らったことでしょう。なんとかアポイントを取るため頑張ったのですが、結果はNON。しかしここであきらめる訳にもいかず無鉄砲にもアポイントも取らず押し付けてしまったのです。

当然、最初は相手にもされず、門前払いの繰り返し。そうこうしているうちにモネの庭の庭園管理責任者である、ジルベール・ヴァエ氏に巡り会えたことが、今日に繋がっていると聞いても過言ではありません。北川村と村民が一体となつての誘致

運動。この情熱に心動かされたか、それ以降は非常に協力的に接していただき、ジヴェルニーのモネの庭より譲り受けた苗などを丹精込めて育て上げ、またその経過をつぶさに報告するなどしながら互いの関係を緊密にしていったのです。北川村での庭園整備の折には、フランスよりジルベール・ヴァエ氏を招き、その指導のもと、村民参加の庭造りを進めることとなりました。

このような努力というか無鉄砲さが認められたのか、一九九九年フランス学士院の権威であるアルノー・ドートリヴ氏からそれまでは門外不出であったモネの庭の名称があるうことか高知県の北川村に贈られる運びとなり、晴れて「北川村モネの庭マルモッタン」と名乗ることが許可されたのです。しかも、名称使用料な



どは一切発生しませんでした。

このような経緯を経て現在があるわけですが、けっして順風満帆というわけではありません。せつかくいいただいた名称を汚すことなく、さらに商業施設として利潤の追求も求められるわけでこれは結構プレッシャーになるわけです。高知市文化振興事業団という固い組織からの原稿依頼に利潤追求の話題もどうかと思いつつ、現実には直面している問題を広く理解していただきたく述べて

いただきます。ジヴェルニーのモネの庭に極力近づける努力をしながら、気候の違いに植栽の選択が大きな悩みとなり、壁の如く立ち塞がることもしばしばありました。また本家はモネ財団の運営。ましてあのクロード・モネが浮世絵に触発されて造った、いわゆるフランス文化と日本文化の融合ともいえるモネの庭。一方、こちらは株式会社。企業としての、利潤追求は当然であり、スタッフの生活も掛かっています。文化的な意

義を継承しつつ商業施設としても成り立っていないかなくてはならないのです。こんな両面を抱えている為にイベントについても文化の香りするものと売上を重視したものとの混在となってしまいます。夏の夜間開園にて夜咲き睡蓮をはじめとした各種の花の紹介と解説。一方、夏特有のビアガーデンで商売、商売。さらに「秋の陶芸&ガーデンング教室」で皆様の知的欲求を満たしながら、秋の宴（紅葉狩り）と名付け園内にて一献交わしていただくといった状況です。

それでも地域に対しても少しは貢献しているという自負もあります。各種学校行事に対する協力・大学生に対するインターシップ制度（実社会研修）への協力・地元産品販売への協力などが、今後も出来る限り心掛けていくつもりです。

そんなことをあれこれ言いつつも、スタッフは全員、頑張っています。台風の最中でも、花を守る為にズブ濡れになりながら防風ネットを張り巡らしたり、冬の凍りつくような寒さの中、水に入り睡蓮の世話をします。こんな努力があつてこそ、季節、季節の花が絶えることなく咲き



乱れるというわけです。また環境問題についても、真剣に取り組んでいます。実は良く見るとモネの庭の植物はかなり虫の被害にあっています。これは庭園責任者の主義で極力、農薬などを使わず庭の維持に努める想いの結果といえるでしょう。次世代に悪影響を残さず人の力で病虫害から花・木を守る、こんなこだわりにはモネも天国で微笑んでくれているのではないのでしょうか。

このような努力・愛情も来園者が多くお見えになってこそ報われるものです。来年は、「花・人・土佐であい博」が開催されます。出会い博に関連した企画も急ピッチで作成中

（まだまだやすお／「北川村モネ」の庭マルモッタン」支配人）





山田 和也

探検家関野吉晴さんの「グレートジャーニー」に同行するようになってから、もう十年になります。テレビ取材のディレクターとして、一九九八年夏の極東シベリアの湿地帯横断に始まり、二〇〇二年にアフリカに着くまで、さらに去年からは「新グレートジャーニー」でヒマラヤ地方から日本を目指す旅に同行しています。それは、私たちの祖先が地球上に拡散していったダイナミックでドラマティックな旅の追体験でもあります。極東シベリアのツンドラを歩いている時、「ここは氷河期が終わった二万年前から全然変わっていないんだよね」と関野さんが発した言葉。足元の凍土をじっと見てしまいました。ここには初期人類が踏んでいた、そのままの大地が残っている。そう感じました。ゴビ砂漠でも、ヒマラヤでも、サハラ砂漠でも同じように祖先の旅を追体験する瞬間があり、そんな時、祖先たちが地球の果てまで広がっていったのは、探検心、冒険心を失わない精神力と未踏の地に歩んでいける体力があったからこそだとイメージしました。

しかし、それだけではなかったんです。プージェーは日本語の通訳になった後、再び草原に戻ったかもしれせん。その時にはプージェーは日本の行き詰まった社会に辟易として、かつては限界を感じていたモンゴルの草原の暮らしにこそ未来があると思ったかもしれません。時を経るに従って、人間の価値観は変化し成長しうるものだと思います。そのように、人類はお互いに変化させあって進化してきたのではないのでしょうか。そして、変化の結果、本当に必要なものだけが残った。人と人が出会い、変化させあって、あらたな価値観を育てていく。それが、人類がアフリカを旅立って南米の南端にまで広がっていった「グレートジャーニー」の現場で起こっていたドラマだった

じゃないかと最近思うようになりました。人が人と出会うことによって引きおこされるエネルギーが、初期人類の旅を支えていたのではないかと。そのエネルギーとは、出会いを交流へと深めていく人間の優しさ、出会うことによってお互いを変化させていく力です。

そんな出会いのひとつをドキュメンタリー映画にしました。「Puujee」というタイトルです。関野吉晴さんとモンゴル遊牧民の少女プージェーの出会いと交流を描いたものです。

六歳にして自在に馬を駆り、牛の群れを追う女の子プージェー。馬に乗ったその足は馬の腹にも届いていません。まるで牛の背に止まった蠅のようです。足をぶらぶらさせながらも巧みにバランスを取り、馬を完全にコントロールしています。写真撮影に夢中になり、つい少女の仕事の邪魔をしてしまった関野さんをプージェーは睨みつけます。「写真撮るんなら、こっちに来ないで！」

その目は、仕事に責任と誇りを持つ者の目です。

関野さんは遊牧民の理想像をプージェーの中に見たに違いありません。関野さんはプージェーの家に通い続けます。突然訪ねてきた異邦人をプージェーの家族は何の先入観も持たないで迎えてくれます。一度目、二度目、三度目と訪問が重なるにしたがって互いの壁はどんどん低くなり、家族のようになっていきました。ある時などプージェーの母は馬を二頭関野さんにプレゼントしようとしてます。アフリカまで行くのなら、馬が役立つだろうから持っていけ、と言うのです。この時、プージェーの家は家畜泥棒に遭い大切な馬の半分以上を失ってしまいました。モンゴル遊牧民にとって馬は乗馬用に止まらず、その乳から作る乳製品は主食のひとつでもあります。ですから、馬を盗られるということはそのまま飢えを意味します。そんな苦境なのに、遠くまで旅をする関野さんに馬を持つていけと言う。そのような旅人に対する優しさは、世界中にまだまだ残っています。

ただし、出会いは時には思いもよらぬ方向に人を変化させてしまいます。プージェーは関野さんによって日本を知り、関野さんに同行してい

た通訳の女性に憧れるようになり、ついには日本語の通訳になる夢を持つに至ります。遊牧民の理想像に惹かれて通ってくる関野さんによって皮肉にも遊牧民ではない将来を選択するようになってしまったのです。

不用意に接触してしまうと、その民族特有の文化を壊してしまうこともあるから、旅の道具である文明の利器、カメラやラジオさえ見せるべきではない、という考え方がかつてありました。しかし、そういう考え方はもう時代にそぐわなくなっています。グローバルな旋風がもつと根本的に文化を変えつつあるのですから。モンゴルにもグローバル化の波が押し寄せ、国際価格の高いカシミア山羊の飼育が急激に増え、草原が荒れてしまうという結果を招いて

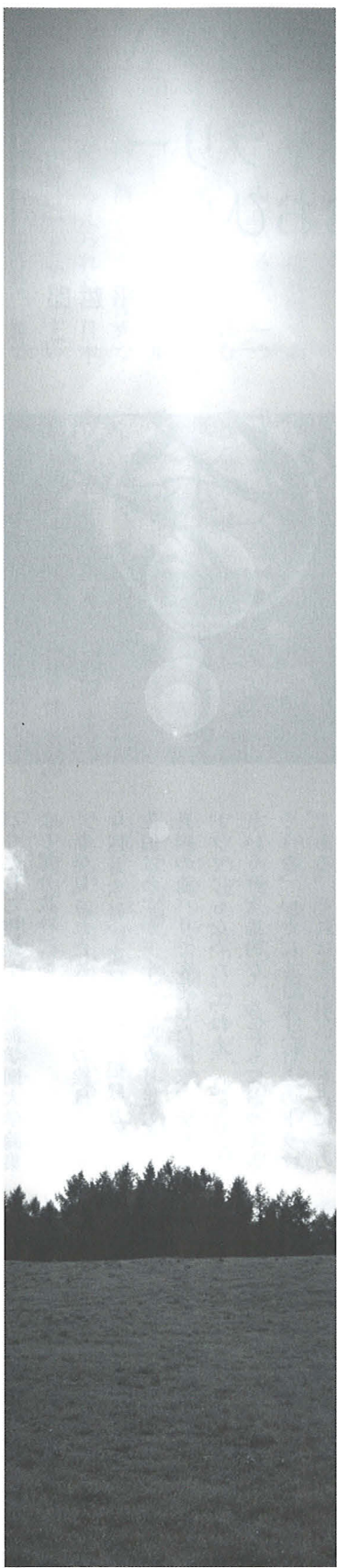
プージェーは日本語の通訳になった後、再び草原に戻ったかもしれせん。その時にはプージェーは日本の行き詰まった社会に辟易として、かつては限界を感じていたモンゴルの草原の暮らしにこそ未来があると思ったかもしれません。時を経るに従って、人間の価値観は変化し成長しうるものだと思います。そのように、人類はお互いに変化させあって進化してきたのではないのでしょうか。そして、変化の結果、本当に必要なものだけが残った。人と人が出会い、変化させあって、あらたな価値観を育てていく。それが、人類がアフリカを旅立って南米の南端にまで広がっていった「グレートジャーニー」の現場で起こっていたドラマだった

ではないでしょうか。

記録映画「Puujee」は、去年六月に公開され、全国の映画館や自主上映会でご覧いただいています。公開後一年たった今年の六月には故郷の須崎で上映会を開いて頂きました。高校生が宣伝の主力を務めてくれたことには感動しました。――八月、初めての海外進出。韓国のEBS国際ドキュメンタリー映画祭2007に参加しました。EBSは韓国国営テレビ局KBSから独立した教育系のテレビ局で、四年前から開催されているこの映画祭は韓国ではとても有名な映画祭だそうです。今年は、七十四ヶ国から合計二百九十二本の作品がエントリーされ、八月二十七日から九月二日までの一週間、二十四作品が会場で、五十八作品が

テレビで放送され、各国から集まった映画・放送関係者による審査が行われました。結果は、まさか、まさかの「Puujee」のグランプリ受賞。驚き、舞い上がり、震える膝を押さえながらステージに上がりました。プージェーは、こうして韓国の方々とも出会えました。九月にはモンゴルのテレビで放映されました。好評だったそうです。急速に草原の生活が変化しているモンゴルで、プージェーの短い人生の記録は失ってしまった物の大切さを喚起できたかも知れません。いずれは高知で上映し、県民の皆様がプージェーと出会っていただきたいと願っています。

（やまだかずや／映画監督・須崎市出身）



# ギャラリー おおひら

大平哲郎



画廊の仕事が始めてから今年で三十三年を迎える。ただ絵が好きという動機であったから今にして思えば恐ろしい限りである。はじめて味わう挫折感や喜びの数々、人との出会い、いづれをとっても今となっては思い出深い事ばかり。

全国を歩き好きな絵を見て回った。古茂田守介、佐伯祐三、お二方ともすでに他界しているので会えなかつたけど彼らの描いた絵との出合いは幸運であった。金さえあれば誰でも扱えるという作品ではない。しかも当時は高額でそれらの絵を貸してもらえただけの信用を得るにはそれ相応の長い年月が必要であった。先日テレビをみていて見覚えのある絵が出た、佐伯の「アネモネ」である。えっ何で？ いま流行りの番組の「鑑定団」である。お客さ

んには鑑定書とともに渡してあるのに、驚きというより再度鑑定？ という気持ちであった。それは佐伯の名画の一品であった。

コレクターの思惑もあるだろうしなともいえない。所詮我々画商なんて空しいものかも。販売すれば仕事が終わるといふケースが多い。やはり番組の鑑定人は「さすが佐伯祐三の名画ですね」のコメント。番組をご覧になった方も多いと思われるが、私のものと同じ合わせがあったので、この欄を借りて詳しく付け加えると、この絵は一九二五年頃の作品、わずか三十年の短い生涯の中で描かれた「カフェ・レストラン」「広告（ヴェルダン）」などの代表作とともに称賛される絵である。

「佐伯祐三が二度目のパリ行き資金作りのため売られた絵、七十年間という空白時間の破損、剥落にその重みを感じられる。（朝日晝・佐伯祐三の

パリに見る焦燥7・北海学園大学論集より部分抜粋）」

新発見されたこの八号の絵は平成四年四月六日、産経新聞に掲載された。佐伯はわずか三十歳と四カ月足らずで異国の地パリで客死した画家、テレビドラマにもなった。「ねえ、見て見て」という野次馬的な、今にもおつてきそうな、いかにも日本人好みのドラマである。それは差し引いても真にこの佐伯祐三という画家の生涯は本当にドラマチックなのである。挿図ではかなり自信をもったペインティング・ナイフで描かれていて、これがあの伝説の画家佐伯の七十年ぶりに目の目をみた作品なのかと、手元に届いた夜はさすがに興奮してしまい、一睡もできなかった。画家の呼吸も感ずるような錯覚、いずれは誰かの手に渡るであろうこの絵の行く末を案ずる気持より資金繰りの不安が脳裏を過つた。「売却のルートに乗った以上、いかなる運命に晒されようがいたしかたがない」、そう思い切ることとした。幸いこの絵は良いコレクターに出会い今も大事にされている。



「アネモネ（個人蔵）」

## 言葉

### の現場から⑥

いよば、言葉(三)

— 深み、おかしみ —

西岡寿美子

二つの言葉が使え、と言っても、同じ日本語の、共通語と土佐弁である。わたしにとっては母語が土佐弁で、後から習得した共通語は外来語である。

も知っているその国の幼児体験の欠落を、怪しまれたのが発端だったそのうである。表層的に言葉は達者に操られても、民族の積み重ねまでの体得は不可能であろう。

言葉で、事柄や思いが全部伝えられるだろうか。とても。とても。肉親を失ったり、恋人に初めて告白したりする時を考えて見るがいい。感情は言葉以前のものだから、すぐには言葉に置き換えられない。呻くとか、のたうつ、とかがまずあって、それに相当する言葉を、長い時間かけて、人間は形成して来たのだ。言葉は今でも全能ではない。

なぜこんな話をするかといえ、論理的なことや、不特定多数への伝達の利便性は、共通語に及ぶまい。ただし、地域内で事の軽重や、心情までを直通させようと思えば、地域の言葉が遙かに勝れているように。

情動は自然発生、言葉は理性である。何気なく口に出ているが、一つの言語は、その国（地方）に住む人々の歴史を背負った深さを持つ。幼時に読んだ話に、髪をオキシフルで脱色し、外国へ潜入した、優秀な日本人スパイが捕らえられた。日本なら「夕焼け小焼け」とか、「ずいずいずいころばし」のような、誰で

とここで、わたしにとって母語である土佐弁だが、これに精通しているかという、われながら怪しい。時折、耳慣れぬ言葉に出会って、

ん？と考え込む。「まあ、暑気（暑気あたり）をしたつかね。それはことゝた（参った）ねえ。ように養ぜ（養生）ないかんぞね。秋になるまでは、あしろうて（加減して）暮らしよ」

と叱られた。ピンチヨウは品定で、これも方言ではない。おかしなのは、家族の誰かが、人にいいようにまゝされる（たぶらかされる）ことで、例えば当時のわたしの兄が、隣の爺さんに、

「坊よ。この荷を谷（屋号）まで持って行ってくれんか。婆さんがおはぎを作るけに」

往復二キロ余の家へ、ホイホイと届けて戻ったら、おはぎは五日も先のお彼岸の話であった、というように、

「また、チヨウサイボー（嘲斎坊）に遭うた」

とぼやくのである。品定、嘲斎坊ともに浄瑠璃本などにも使用例があるが、未だに健在な土地は少なからう。わたしはちよいちよい楽しんで使っているが。

（にしおかすみこ／詩人）

とここで、わたしにとって母語である土佐弁だが、これに精通しているかという、われながら怪しい。時折、耳慣れぬ言葉に出会って、

「ピンチヨウを言うでない」

「また、チヨウサイボー（嘲斎坊）に遭うた」

# 天下の『朝日新聞』に噛みついた男——馬場孤蝶——

高橋 正

孤蝶・馬場勝弥（明治二〇昭和十五年）は高知市出身の文学者で、島崎藤村とは明治学院で同窓、生涯の友であった。孤蝶は、明治浪漫主義文学の牙城、「文学界」の同人として、ロマンチックな詩や小説を書いたが精彩を欠き、文学者としては影が薄かった。だが、慶応三田で教鞭をとるかたわら、抜群の語学力を駆使、ヨーロッパ文学の翻訳・紹介・研究面で先駆的な業績を数多く残している。本邦初訳、トルストイの『戦争と平和』（国民文庫刊行会 大正三〇四年）はその最たるものである。



馬場孤蝶

与謝野晶子の「馬場孤蝶先生」と題する詩の一節に、「わたしの孤蝶先生は、／ものおやさしい、清んだ音の／

乙の調子で話す方、／ふらんす、ろしあの小説を／私の為話す方。」とある。これは、明治四十年六月結成の闊秀文学会での孤蝶の講義の印象を綴ったものらしい。

明治四十一年七月の第二次桂太郎（陸軍大将）内閣の誕生とともに、日露戦争の戦勝に酔って、軍拡路線が強力に推し進められ、社会主義者や文学者に対する弾圧が格段に激しくなった。明治四十二年十月二十五日の『東京毎日新聞』に、与謝野晶子の次のような歌が載った。

英太郎東助と云ふ大臣は文学を知らずあはれなるかな

桂内閣の文相小松原英太郎や内相平田東助らが、「風俗壊乱」を口実に、森鴎外の『キタ・セクスアリス』や永井荷風の『ふらんす物語』などの恋愛小説の傑作を次々と発売禁止にした無知を嘲笑したのである。

一方、社会主義者に対する弾圧も酷烈をきわめた。「昆虫社会」という本も、「社会」の文字が当局に嫌われ、発売処分を喰らった。

近代日本のターニングポイントとなつた、いわゆる大逆事件——明治天皇暗殺未遂事件の検挙が始まった明治四十三年五月以降、官憲による言論弾圧に加え、民間の迎動的動きも活発化した。

『東京朝日新聞』は明治四十三年九月十六日から十月四日にかけて、「危険なる洋書」と題する特集記事を十四回も連載した。その主旨は、わが国の風俗を壊乱する自然主義小説（恋愛小説）も安寧秩序を紊乱する社会主義も、それを媒介したのは「洋書」である。「危険なる洋書」を駆逐せよ、というのである。『朝日』が指弾する「危険なる洋書」の著者たちの顔触れは、イブセン、モーパッサン、フロベール、ゾラ、トルストイ、ゴーリキー、ツルゲーネフ、クロポトキン、オスカー・ワイルド、ニーチェ、マルクスなど、いずれも当代を代表する最高級の文学者・思想家ばかりであった。たとえば、イブセンについての『朝日』の記事には、近頃、日本の厳格な家庭に風波を起す様な危険な思想を懐いた女が続出してゐるのは、イブセンの劇、『人形の家』の翻訳書が日本の本屋の店頭と並んでゐるからだなどあり、きわめて短絡的かつ幼稚な、時代錯誤的論旨である。

とである。既往の何世紀をも経つた因習の重量の下に悩んで居る人間を何うするか、といふのが、優れた文学者に取つての問題であるのだ」と格調高く正論を述べ、イブセンの『人形の家』にぴったりの解説とも読める。

『朝日』が「危険なる洋書」と断じてやまないヨーロッパ文学の翻訳・研究を本業とする孤蝶は『朝日』の理不尽で迷妄きわまりないこの特集記事に對して、当然ながら激怒し、激しい呪詛の言葉を投げつけた。

◎当局者の文芸に対する取締まりが今のやうに厳しくなつては、日本には殆ど思想と云ふもの、存在する余地がなくなつて了ふ。(略) ◎朝日新聞では危険なる洋書として外国文学の書類の禁止を盛んに叫んで居た。人間の思想と云ふものがそんなに怖ければ、五十年も六十年も前に返つて鎖国主義を取ると好い。(略) (新潮) 明四三・一一・二)

国家権力による大逆事件捏造の陰謀が着々と進む中で、本来、社会の木鐸たるべき天下の大新聞『朝日新聞』が、「思想的鎖国令」同然の愚劣な洋書害毒論を説き、官憲による思想・言論の自由の圧殺に臆面もなく手を貸している醜態に、孤蝶は腹を立て、土佐犬の如く噛みついたのである。

（たかはしただし／高知ペンクラ）  
（会長）



## バーデン市立劇場オペラ「椿姫」

9月25日、高知市文化プラザかるぽーと大ホールで、今回で三回目となるウィーンの森バーデン市立劇場のオペラ公演が開催されました。バーデン市はウィーンの南にある温泉地で、モーツァルトやベートーヴェンといった著名な音楽家が保養に訪れたことで知られています。バーデン市立劇場は1716年に創立された歴史ある劇場で、来日公演も200回を数えます。

今回上演された「椿姫」は青年貴族と高級娼婦の悲恋を描いた名作で、「蝶々夫人」「カルメン」と並んで世界三大オペラと呼ばれています。ヨーロッパ屈指の名門による公演ということで市民の期待も大きく、会場を埋め尽くした観客は眼前で繰り広げられる華麗な舞台に酔いしれていました。



朗読ボクシング協会  
www.jrba.net

## 高知市文化プラザ かるぽーと 9月～10月の事業のご報告

### ホリカワアートミーティング2007

9月15・16日の両日、地域に開かれた文化施設を目指すアートイベント「ホリカワアートミーティング2007」を開催しました。

会場ではアートフリーマーケットをはじめ、カヌー体験や美術ワークショップなど、多数のワークショップを行い、あいにくの雨にもかかわらず、参加者は思い思いにアートを楽しんでいました。

地元の菜園場商店街の協力で制作した「サエンバーガー」は当日会場でのみ販売ということもあり、沢山の方々にお買いあげいただき、両日も完売となりました。

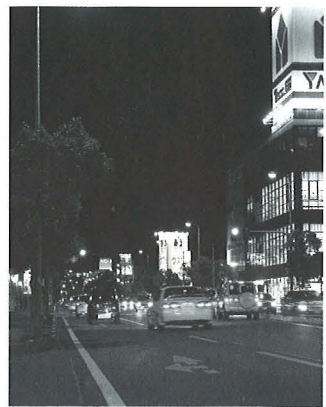
この他にも「高知街ラ・ラ音楽祭」のかるぽーとステージや、松山を拠点に活躍するコンテンポラリーダンスカンパニー「ヤミダンス」の公演など、音楽にダンスに充実したイベントになりました。



### 二試合制選抜式「詩のボクシング」全国大会

8月22日に開催された「第6回詩のボクシング高知大会本大会」に引き続いて、10月6・7日の二日間にわたり「二試合制選抜式 詩のボクシング高知大会」が開催されました。

ボクシングのリング上で朗読ボクサーと呼ばれる選手二人がそれぞれ詩を朗読し、審査員による判定で勝敗を競う「詩のボクシング」ですが、今回の大会は過去の全国大会で好成績を残した全国からのボクサー8名によるトーナメント戦を軸に、朗読劇、群読、よさこいを組み合わせたこれまでにない試みで、観客は「ことば」による新しい表現の可能性を探る意欲的な舞台に興味津々でした。



### 北環状線の景

# 景観考

タケムラナオヤ

道の向こうにイオンがみえる。かつてはりまや橋からお城が見えたのと同じように、いま、高知の街

ではイオンがみえる。のだ▼そもそもバイパスには風情がない。みんなおらがおらがとアピールをする原色じみた看板が立ち並び、一步間違えれば歌舞伎町あたりのそれと変わらないような強いメッセージを発している▼大きな駐車場がまるで蜘蛛の巣のようにお客を吸い込み、そこではひたすらに消費が繰り返される。日曜市も同じように消費の風景じゃないかと思うかも知れない。だけど、その風景は生産の現場と密接に重なり合った風景だ。だから、暖かい▼だけど、この風景の中に、生産の現場はなかなか見えてこない。だから、どこか寒々しい。

## 風伯

### 墓地には曼珠沙華がよく似合う

で真黄色な月見草が次々と花弁を開いていた記憶がある。

傍らには樹齢何百年と言われる榎の木が、年中様々な賑わいを見せていたものだ。ともあれつい最近までは秋になると墓地の縁は真っ赤な花弁を伸ば

富士には月見草がよく似合うと言った小説家がいたらしいが、あえて墓地には曼珠沙華がよく似合うと言いたい。そういえば昔、田舎で夕方涼しい風が起こり、墓地に続く段々畑を吹き抜ければじゅん、音をたてるような勢い

した燃えるような曼珠沙華で覆われていたものだ。最近といえば、田舎の古くからの墓地へ納骨堂を建てた。街に造る納骨堂からすれば約半額で済むし、年に二回彼岸には墓参りの名目でドライブが楽しめると思ったのだ。

「どうした事よ。みんな古い墓は整理して街へ出ていきよるに。変わっちゃよるねえ」と言うのが村人大方だった。そう言われれば、村のあちこちの墓石は消え、榎も花柴も榎も切り倒され、赤茶けた泥土が残されている。むしろそこには永年住み着いていた月見草は無く、畑を守って何十年も真っ赤な花を咲かせていた曼珠沙華も掘り出され枯れあがっていた。

(3)



## Original goods Artist goods Ticket

かるぽーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動が続いている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われる様々なイベントのチケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田2-1  
高知市文化プラザかるぽーと3階  
Tel 088-883-5052  
毎週月曜休業（祝休日の場合は営業）

## 今号の表紙

### 「ライン」

東富晋幸

仁井田漁港で進水したばかりのタンカーですが、赤と黒の色彩をバックに横のライン縦のラインに新鮮さを感じシャッターを切りました。写友に私の作品は変わった作品が多いとよく言われますが、私の師事している大阪芸大有野教授の「新しい視点」が原点でしょうか。これから全方位に好奇心を持ち続け新しい被写体の発見を私なりに追求できればと思っております。

(とうとみのふゆき)



## 高知を撮る

第23回写真コンテスト入賞作品

## 一網打尽

(平成18年 春野町森山)

橋本 豊喜

落鮎の解禁日、早朝6時30分を合図に我先に網を打ち、漁獲を楽しんでいた。

「苦学生」という言葉を近頃ほとんど聞かなくなつた。若い人のために解説すると、「苦学生」とは、家が貧しいため、アルバイトで生活費や学費を稼いで勉学する学生のことである。最近、いわゆる流大では、高収入の階層出身の学生が多くなり、昔のような苦学生はほとんど居ないとされている。苦学生が居ないのは貧乏が無くなったからではない。主な理由は、貧乏でアルバイトに追われていては受験競争に勝てないし、勝つても学費がべらぼうに高いからである。小学校から家庭教師や塾のお世話になつた者と、アルバイトに多くの時間を費やした者とが、無条件で競争すれば結果は目に見える。

## 「苦学生」



### 風俗歳時記

一九四九年の授業料を、平均世帯の収入比をもとに現在に当てはめると、月額二万二千元になり、この金額ならアルバイトで稼げるかも知れない。でも、生活費のほかに四万四千円も稼ぐことは不可能である。この異常な授業料の値上げを推進してきた最大の力は、私立大学経営者の政治力である。私立と国立の授業料の「格差」が広がる「経営」に支障が出るという理屈である。つまり、私立の利益のために苦学生が犠牲になったと言える。

(路)



高知市文化プラザ活性化事業 第3回美術作品コンクール

# CONCOURS des Tableaux

## 資格

県内在住あるいは県出身者で  
18歳以上35歳未満の個人  
(平成20年4月1日現在)

## 対象

平面作品  
(容易に壁面にかけてられるもの)  
書、写真は対象外

## 賞

★最優秀作1点  
賞金30万円  
★優秀作2点  
賞金各5万円

## 規格

260cm×260cm(枠・額を含む)  
以内の作品、2点まで出品可(未発表作品に限る)  
枠装、額装あるいは容易にワイヤー・フック等で  
壁面展示可能なもの(ガラス・アクリルの使用不可)

また、最優秀受賞アーティストは  
受賞後概ね6ヵ月以内に市民ギャ  
ラリーにて、(財)高知市文化振興  
事業団主催の企画展を開催する  
ことができるものとします。

- ※1)展示作品の天災、不可抗力、いたずら等による損害について  
主催者は責任を負えません。
- 2)作品に水、生花等生ものの使用を禁じます。
- 3)枠装、額装などに不備のある作品は受付できない場合があります。
- 4)展示後の作品は、加筆、撤去、配置替え等を行わないことを原則にします。

## 作品 搬入

平成20年  
1月19日(土)・20日(日)  
9:00~17:00

7階市民ギャラリー第3展示室に  
直接作品を持参のこと。  
郵送の場合は1月19日必着

## 搬出

1月27日(日) 17:00~

## 一般 鑑賞

1月22日(火)~27日(日)  
※展示は事務局に一任のこと。

## 選考 及び 発表

審査1月27日(日) 14:00~16:00  
表彰式 16:00~

※作品の選考は、最終日展示会場での公開審査とし、  
引き続き同会場にて結果発表・表彰式を行います。

## 応募 方法

書類での事前申し込みです。申し込み用紙  
に必要事項を記入の上、作品の写真(制作  
中のものでも可)を添付し、

1月9日(水) 17:00までに

事務局に提出のこと(郵送・持参いずれも可)。  
これ以後も搬入日まで受付を行います。その場合には展  
示場所・目録掲載等に十分配慮できない場合があります。  
1月19日(土)・20日(日)いずれも17:00までに作品を  
かるぼーと7階市民ギャラリー第3展示室に搬入ください。

応募作品はすべて返却します。ただし申込用紙・写真は原則として返却いたしません。

## 茂木 健一郎 プロフィール

脳科学者。ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサ  
ーチャー、東京工業大学大学院連携教授(脳科学、認知科学)、  
東京芸術大学非常勤講師(美術解剖学)。1962年東京生まれ。  
東京大学理学部、法学部卒業後、東京大学大学院理学系研究科  
物理学専攻課程修了。理学博士。理化学研究所、ケンブリッジ  
大学を経て現職。  
主な著書に『脳とクオリア』(日経サイエンス社)、『生きて死ぬ私』

(徳間書店)、『クオリア入門』(筑摩書房)、『The Future of  
Learning』(共著)、『Understanding Representation』(共著)がある。  
専門は脳科学、認知科学。「クオリア」(感覚のもつ質感)をキー  
ワードとして脳と心の関係を研究するとともに、文芸評論、美  
術評論にも取り組んでいる。2005年『脳と仮想』で第4回小林  
秀雄賞を受賞。2006年1月より、NHK『プロフェッショナル  
仕事の流儀』キャスター。

## 応募先 問い合わせ

〒780-8529 高知市九反田2-1 かるぼーと8階  
(財)高知市文化振興事業団 企画事業課「美術作品コンクール」係  
TEL:088-883-5071 FAX:088-883-5069 <http://www.bunkaplaza.or.jp/>

主催:(財)高知市文化振興事業団 助成:(財)地域創造